学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.95 2014年12月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2014年12月22日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

MBA

中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.34

＜創意工夫で自塾を盛り上げよう！＞

総選挙も終わり、冬期講習の集客は、ここからが本番。機会損失することなく、しっかり問合せを体験に結びつけ集客を行ってください。

ところで、弊社の顧問先の冬期講習の在籍生の売上結果を紹介しましょう。

今年の冬期講習の設計から関わった個別指導の塾は、４社ありました。

Ａ塾は、６校舎を抱え、在籍生数が昨年の 2/3 に減ったとういうことで、今年の６月から顧問先となりました。その結果、今年の冬期講習は在籍生の売上が昨年対比 140.5%になりました。さらに、今年の夏期講習の売上と比べても 120% 以上を記録しました。

Ｂ塾も、在籍生数が昨年の 1/2 近くまで減少していて、今年の６月から顧問先になりました。この塾は、集団指導部門と個別指導部門を抱えていますが、冬期講習では、個別部門の売上が昨年対比 180% 近くになり、全体では、売上が昨年対比 100%まで戻りました。

Ｃ塾は、某ＦＣ加盟校で５校舎を抱え、停滞を打破しようと今年の９月から顧問先になったところです。冬期講習の在籍生の売上は、昨年対比で 143.4%になりました。夏期講習との比較でも、110%を超えました。

Ｄ塾は、「地域 No.1 塾」を目指して、９月から顧問先になったところですが、冬期講習の在籍生の売上が昨年対比で、130.4%になりました。

顧客に対する提案の仕組みとツールをちょっと変えるだけで劇的に結果は変わります。皆さんも、創意工夫をしてみてください。それでも駄目なら、是非、弊社にご相談ください。

さて、今回の本題ですが、顧問先のちょっとした工夫について紹介したいと思います。誰でも出来る簡単な工夫が意外と効果があるのです。

弊社の顧問先で生徒を順調に伸ばしている個別指導塾があります。もともとＦＣ塾でしたが、経営が上手くいかなくなり、５年前に弊社のコンサルの門を叩かれました。設計を変更し、弊社の集客手法を学び実践し、今年も順調な運営を続けている塾の一つです。

この塾は、主に塾長のＨ先生がお一人で切り盛りしています。今回は、Ｈ先生の実践をご紹介します。Ｈ先生は本当に努力を重ね、様々な実践をしていらっしゃいます。

まず自習です。自習ブースを確保し、積極的に生徒を自習へ呼びました。演習量の確保と自律学習の必要性を考えた上での「自習」であるのはもちろんですが、Ｈ先生にはもう一つ別のねらいがありました。

それは、自習を「コミュニケーション機会＝モチベーション機会」とすることです。普段の授業は講師に任せることが多く、塾長のＨ先生が生徒一人ひとりと、じっくり直接コミュニケーションを取ることは、生徒面談以外にありません。そこで、Ｈ先生は自習に来ている生徒をつかまえて、積極的にコミュニケーションの機会を創っているのです。

また、自習の方法に関して言えば、（賛否両論あると思いますが）Ｈ先生はコピー機の使い方を生徒に教えました。そのため、主に学力上位の生徒の中には、塾にある参考書やプリントの中から自分に必要なものを選び、自分でコピーして学習する者もいますし、貸出用の参考書

合資会社マネジメント・ブレイン・アソシエイツ
教育コンサルタント　中土井鉄信

や問題集を借りながら勉強している者もいます。コピーの乱用は、今のところ見受けられないとのことです。

この他、H先生はとにかく「生徒が家に帰ってからのこと」を考えています。生徒が家に帰ってから勉強することを考えて、授業に関連したプリントを渡したり、「理社暗記マラソン」などのテスト対策イベントの際は、「おまけプリント」を作成し、生徒に配布したりしています。もちろん、やったかどうかのチェックを欠かしません。

ブースには、H先生からのメッセージとして、「できない人は言い訳を考え、できる人は方法を探す」などの偉人や古典の言葉が掲げられています。

保護者面談では、お母さんに子育てに関する本やH先生が読んで心に残った書籍の紹介などもしています。

実践している一つひとつは、どこかの塾でもやっていることかもしれません。しかし、H先生は決して途中でやめることなく、始めたことは必ず継続させる強い意志をもっています。

「塵も積もれば山となる」、「継続は力なり」をまさに実践している、そんな学習塾がH先生の教室です。生徒・保護者にとって良いと思うことを細部にまで渡って実践しているのです。

そんな努力が実って、地元で評判の良い塾になりました。ＦＣに加盟している時には、ここまでやれなかったそうです。なぜならば、やる意味を知らなかったからです。私どもとコミュニケーションを取り続けている中で、塾として何をやればいいのか、それにどんな意味があるのかに気づいたのだそうです。やる意味がわかれば、徹底もできるし、続けられると言うものです。ぜひ、皆さんも、行動の意味を自覚して、生徒や保護者と向き合ってください。

【あとがき】

今回が今年度最後の原稿になります。読者の皆様、1 年間お読みいただきありがとうございました。次年度も、少しでも皆様のお役に立てるよう力を込めてこの原稿を執筆致します。また、メルマガの他にも皆様を支援する様々な企画を検討中です。是非、新しい年も MBA をよろしくお願い致します。それでは、皆様、良いお年をお迎えください。

【学習塾における教材使用に関する注意喚起】

日本では、著作権法の定めるところにより、著作物は著作者の権利によって保護されており、著作権者に無断で“複製”などをしてはならないこととされています。学習塾において使用する教材についても、法律に基づいて適正に使用しなければなりません。

次のような教材使用にあたりましては、十分に注意を払っていただきますようお願いいたします。

1．他者の著作物を複製して、自塾独自の教材を作製すること。
2．著作権者に許諾を得て作製された教材を、複製して使用すること。
3．著作権者に許諾を得て作製された教材を、複製して貼り合わせてプリントなどを作製して使用すること。

これらの行為には、著作権者の許諾が必要です。必ず、著作権者の許諾を得て使用していただきますようお願いいたします。

＊複製とは、印刷、写真、複写、録音、録画、その他の方法により有形的に加工して別の製品に作り直すことをいいます。

合資会社マネジメント・ブレイン・アソシエイツ
教育コンサルタント　中土井鉄信

公立中高一貫校シリーズ Vol.10

「身近な事象にどれだけ興味関心があるか 幅広く社会に目を向けているか」

適性検査問題ではどのような出題がなされるのかを前々回、前回と見てきました。

今回は理科、社会科分野ではどのような傾向にあるのかを見ていくことにしましょう。

ほかの分野でも指摘したことですが、適性検査では受検生がどの程度の知識を有しているかよりも、与えられたテーマ、条件を基にしての問題解決能力がどの程度備わっているのかを重視しています。このことは理科、社会科分野ではさらに強くなっていると思われます。

理科分野では、問題解決能力の有無を見ようと、実験や観察を素材として、与えられた条件から予想を立てる、論理的に思考することに重点が置かれた出題が目につきます。

自然科学への興味や関心の程度を見たり、生態系や環境問題を素材とした、身の回りにある事象への好奇心を見る出題は続いていますので、身の回りにある事象へ興味や関心を持つことが大切です。

たとえば、その年（受検日の前年）に話題になった天体の動きや最近日本列島のあちこちで頻発する火山活動、地震あるいは異常気象などへの関心度を高めておくことなどです。

学校によっては表現する力、論理的に思考する力を求めてきますので、理科的な考えをベースにして、きちんと表現していく訓練もやっておきましょう。

身近なことへの観察力を見ようとするものとしては、例として挙げた都立小石川中等教育学校の出題を見てください。

顕微鏡で拡大された鉛筆、赤鉛筆それぞれで書かれた部分と何も書かれていない部分の拡大部分を観察して、何が理由なのか思考させるものです。

社会科分野では、暗記型というか知識がどこまであるのかというようなものではなく、資料から読み取った内容を小学校で学んだ基本的な知識や経験にどう関連付け、総合的に思考し説明できる力が求められているのです。

また、リサイクルやごみ、エネルギーなどの環境問題、社会問題への問題意識の有無に重点を置いた設問は毎年のように出されます。

理科分野でも言えることですが、これだけグラフや資料を材料として出題されるのですから、グラフや資料などの読み取り力を高めておく必要はあるでしょう。

普段から目的意識を持って、資料やグラフに接することが大切です。この資料から何が読み取れるか、どの変化が重要なのかと考えながら見る習慣をつけておきたいものです。

普段の問題演習でもこういう姿勢を確立しておきますと、自然と情報処理能力は高まりますし、設問は資料のどこに注目せよと言っているのか、どのような問題意識が込められているのかが見えてきます。

そして、問題演習が単なる演習ではなく、設問を通して、日本に関する様々な問題が見えてくるはずです。

たとえば、広島県立広島中学校の問題では、「林業の就業者数の変化」「林業の就業者数にしめる高齢者の割合の変化」「森林ボランティアの団体数の変化」の３つの資料を用いて、「森林のはたらきと関連」付けて、どのようなことをまとめますかというものです。

これこそどこに注目すればいいか、そこから見えてくるものをどう表現するかが問われます。

就業者数の減少に注目するか、高齢者の割合が高まっていることに注目するか、ボランティア団体が増加していることに注目するか。

日本の林業が抱える問題がそこから読み取れるはずです。

字数指定はありませんが、解答用紙のスペースなどを見る限り、160 字～ 200 字は書けますので、それだけの内容を込めていかなくてはなりません。

同校では例に挙げた設問の前に、「伝統芸能を直接鑑賞すること」についてどう思うかを資料を基に、200 字で書きなさいという設問もあるのです。

理科分野でも触れましたが、社会科分野でも相当程度の表現力、記述力が求められているということになります。